

2002 年 野尻湖合宿に参加して

松尾 文子（後援会員）

今年も夏恒例の野尻湖合宿に参加させていただき、ありがとうございました。普段の練習は失礼してありますが、バスの団員松尾の家族としてこの機会に与えられることを幸いに思います。早いもので、1989 年、1 歳半の長男を連れてこの合宿に初めて参加して以来、今年で 13 年目になり、ドイツ演奏旅行と出産の年を除けばほぼ毎年という具合に、野尻湖合宿は我が家の年中行事となっています。雑事に追われて個人的な歌の練習もままならない日常から開放されて、豊かな自然を目にしながらかじりと合唱に取り組めた 4 日間は、とても貴重な時間でした。

今回取上げられたカンタータは、124 番、104 番（この 2 曲は抜粋）そして 150 番でした。いずれも名曲ですが、150 番は特に気に入った曲で、合唱曲が連なっているため全曲演奏となり、歌いがいいこともよかったです。食事のテーブルで、この曲に関して 2、3 の話題に接することができました。まず、この作品はバッハの真作か否か、あるいは作曲時期が初期か後期かといった議論があること 練習後この点を巡って音楽談義となり、バスの団員の何人かが食事時間に遅れてしまったというのも、何とも魅力的な話でした。それから、第 5 曲「杉の歌」の杉という言葉は、バッハのカンタータの歌詞としては珍しいのではないかという意見が出、聖書のどこかに出ているかという話題に発展して行きました（不勉強なクリスチャンとしてはどこかで見たことがあるとしか言えず、後で聖書をパラパラ調べているうちに見つけた個所にイザヤ書 2 章 13 節がありました）。食事中もカンタータを通して共通の話題を見つけることができ、愉快でした。

子供たちが幼いうちは、合唱練習に参加できず、家にいても野尻湖に来てその点に関しては同じだなと思ったりしていましたが、近年では、子供たち同士で自由に遊び（湖畔で遊ぶときはライフジャケットを身につけることにしています）私も練習に専念できるようになり、親子共々有意義に過ごせるようになりました。またさらに、早朝テニスやサイクリングなどにも親子で加えていただき、色々な団員の方たちと交流を持てるのが子供たちの社会的な成長にとっても役立つこととありがたく思ってい



開演を待つ神山教会

ます。特に今年は、健二さんの甥御さん、19 歳の巨くんが、お風呂で子供たちと会話を交わしてくれたことが、彼らにとって嬉しいことだったようです。

2 日目の自由時間で、黒姫童話館見学グループに合流した折り、移築されて保存されている岩崎ちひろのアトリエを兼ねた山荘を訪れる機会を得ました。アトリエを中心に必要最低限のものが備えられた簡素な造りの山荘で、あまり知らなかったちひろの生涯を年譜で読み、2、3 の原画を眺めたりしながら、その人となりや画業に思いを馳せたりして過ごしました。年譜によると、最初は書を学んでいたとのことで、そういえばあの淡いタッチの独特な画風に水墨画の影響を見て取れるような気がしました。山荘の入り口脇に、「うさぎ風呂」と名づけられた小さな木作りの風呂桶がありました。女性の団員が、近くにいたバスの山下さんに、「山下さんには小さすぎて入れませんね。」と言って笑わせていましたが、冗談抜きでそれほど小さな可愛いお風呂でした。その山下さんの奥さんが私にそっと打ち明けて、「主人は今の今まで岩崎ちひろが女性だということを知らなかったんですよ。」と言われたので、また笑い話のようだと思っていたところ、後で夫が、「岩崎ちひろは女性だったことを実はきょう初めて知ったよ。」と言ったので、オチがつくようなことになりました。その後で伺った話によると、山下さんの場合は甥御さんにちひろと言う名前の方がいるとのことで、合点が行きました。このように色々楽しく過

ごせた山荘見学の中で、一つ印象的な言葉がありました。アトリエの前に置かれた札の説明文に書かれてあった、「日常の雑事から逃れて画業に専念するために」という言葉です。この野尻湖合宿は、ちょうどこのちひろ山荘のような働きをしてくれている事に気づきました。

この2日目の夕方には、湖上レストラン（今はルビーホール）でミニコンサートが行われました。毎年様々な団員の方の秘められた才能が披露されます。ここ数年、私たちも家族で出演したり、さらに、団員の方々のアンサンブルにも加えていただき、気軽に音楽を楽しめる場として最高の機会を提供していただいています。

今年はその一つに、ソプラノの菅原さんが歌う「さとうきび畑」の伴奏をさせていただく機会がありました。この曲は、以前から何回か耳にし、ここ数年身近な所で関係することが多くなって、ちょうど作曲家（寺島尚彦）によるオリジナルのピアノ伴奏譜を入手したところでした。昨年この曲の由来などが紹介されたテレビ番組がありましたが、その中で作曲家自らが、「ざわわ」という言葉を思いつくのに2年ほどかかったと話していたことが心に残りました。沖縄の戦争の記憶を風化させないために作品を作り歌い継がれて行くことを願った作者が、一心に捜し求めた言葉だったというわけです。翌日の練習時間に大村先生が、「さとうきび畑」のことに触れられて、「ざわわ」には「厭戦」の響きが感じられるとコメントなさっていました。全曲通すと10分ほどにもなる「さとうきび畑」は、静かに淡々と進んで行く中に平和を願う心を人々に呼び覚ます、稀有な歌の一つだと思っています。

そしてこの合宿のハイライト、3日目夜の神山教会での演奏会がまた格別でした。いつもながら、コンサートに先立っての団員代表のプログラム解説（今年はバスの山下さん）には、感銘を受けました。コンパクトな中にエッセンスが凝縮されている名解説によって、本番に臨むよき心備えができました。前半は124番と104番 大村恵美子先生の指揮のもと、小田幸子さんのヴァイオリンと内山亜希さんのピアノによるオーケストラ部分が素朴な木造の教会堂に響き渡ります。これにのって合唱は気持ちよく歌い出すことができました。二重唱やソロの団員斉唱による演奏も無事通過し、後ほどアンコールとして聴衆の方々とも一緒に歌うことになるコラールをもって前半を終了。

今回はカンタータ3曲（抜粋曲あり）だけでも充実したプログラムと言えますが、プログラム後半の最初に演奏されたハチャトゥリアンのトリオがとても見事で、その場でアンコールが出るほど感動的な

ものでした。内山亜希さんのピアノ、そのご主人・内山厚志さんのクラリネット、小田幸子さんのヴァイオリンのベストコンビネーションによるプロの技を堪能しました。これによって聴衆の集中力が高められ、この後のカンタータ150番もいっそうよく聴いていただけたようで嬉しかったです。国際村の子供たち数人による可愛らしい花束贈呈と計画にはなかった追加アンコール「杉の歌」をもって終了、宿に帰って打ち上げのひと時となりました。

音楽を交えた人々との交流の中に祝福を覚えた野尻湖合宿。4日間の合宿期間が充実したものとなったことを、大村先生始め団員の方々に心より感謝しています。

おたより

原田 知子（後援会員）

3日はとても楽しい一時でした。カンタータはもちろんでしたが、ハチャトゥリアンもよい曲ですね。アンコールがたくさんで、時間が遅くなり、帰りを急ぎましたので、ごあいさつもせずに失礼しました。

今年は、せみは沈黙でしたね。そのかわりほたるに会いました。

私は神山教会できくカンタータが大好きで、今回も毛穴が開いて鳥肌が立つ、ゾクゾクする感激をひとりであじわい、余韻をかみしめながらの夜の山道ドライブでした。

テノールにダントツ若い方がいられて、これからも楽しみです。どうぞみなさまによるしくお伝え下さいませ。

信州・野尻湖畔へ32回目のバッハ演奏旅行

山下 広之（団員・バス）

2002年8月1日（木）の朝は快晴であった。今日から4日間、野尻湖畔のホテルでバッハの合唱曲の仕上げの練習を行い、野尻湖国際村の神山教会で演奏会を行うことになっている。

6時から野尻湖の湖面を眺めながら食堂で夕食。7時から湖面に浮かんだホールで練習を開始。ルビーホールといいグランドピアノが置かれた広い練習場である。正面に黒姫山、右手に妙高山、左手に戸隠、飯綱の山々が並ぶ景色のよい中での練習である。湖面を渡ってくる涼風が大変気持ちよい。時々船が揺れる感じがあるのも楽しいものだ。

体操で体をほぐした後、ロングトーンの発声、それに母音をつなげて歌う練習で、ドイツ民謡の「月に寄す」を教材とした。練習は9時まで行われ、これで今日のスケジュールは終わりとなった。部屋に戻り缶ビールを飲みながら、岸辺に寄せる波の音に耳を傾けているうちに静かな眠りについた。

翌8月2日（金）は野尻湖に輝く朝日の輝きで目

覚めた。7時から湖岸で朝の体操。9時からカンタータ3曲を10時40分まで練習。その後演奏会に向けてソプラノ、アルト、テノール、バスの順でアリアの練習を行い、午前中の練習を終了した。

午後はホテルからバスを出していただいて黒姫高原の散策に出かけた。運良く太陽の照り返しが無い曇り空で、牛が草を食む高原を散策し、黒姫童話館を訪れた。黒姫に住んでいるC.W.ニコル氏のコーナーやミヒヤエル・エンデ氏の紹介など、楽しく見学した。また今年から岩崎ちひろ氏の野尻湖の山小屋とアトリエが移築されて展示されるようになった。約25年前に55歳で亡くなっていることも初めて知ることができた。高原のソフトアイスクリームも美味しく味った。

3時にホテルに帰着し、出していただいた朝もぎのとうもろこしを賞味して一休みしてから、ルビーホールで団員の出演によるミニコンサートが開かれた。正面に信濃の山並みと野尻湖の漣を視界に入れながらの涼しいコンサートは大変気持ちがよいものである。ソプラノの荒井さんと川合さんお2人の司会進行によるコンサートは楽しく進んだ。

夜7時からカンタータの練習を8時半まで行き、その後湖岸で大花火大会を繰り広げ、夏の夜のひと時を楽しんだ。明日の演奏会を前にして少し早めに寝に就いた。

8月3日(土)は演奏会当日である。9時から漣と涼風と山の景色の中で気持ちの良い練習をした。カンタータ3曲を仕上げ、合宿のすべての練習を終えて、あとは演奏会場でのリハーサルを待つだけとなった。

昼食後にホテルの自転車を借りて、旧北国街道沿いに屋台を出して売っているこの北信濃特産の朝もぎのとうもろこし、赤い色をした南瓜、それに一抱えもある巨大な夕顔の実を買いに行った。

演奏会の身支度をして3時半に全員ルビーホールに集まり、サンドイッチと飲み物の軽い食事をとってからホテルのバスに乗り込んで、対岸の国際村にある神山教会に向かった。ここで舞台リハーサルを入念に行き夕方7時の開演を迎えた。

神山教会での東京バツ八合唱団の演奏会は今夏で32回目となる。今回のプログラムは最初はカンタータ124番と104番。休憩を挟んでハチャトリアン三重奏曲、最後にカンタータ150番を演奏する。

演奏会は最後に会衆と一緒に124番と104番のコラールを合唱して終えた。アンコールが何回も繰り返された後、可愛い外国人の子どもたち6人がステージに現れて花束を贈ってくれた。コンサートは予定より超過して盛会のうちに終了、合唱団のメンバーはホテルの迎いのバスで帰り、盛大な夕食会が



童話館のアプローチから黒姫高原を見わたす

待っているが、私たち夫婦は、少し先の新潟県上越市高田に娘が単身赴任しているため訪問することになっている。最終電車で無事目的地に着いた。

翌日は高田公園の蓮を見学し、その広大さと数の多さ、花の見事さに感嘆して再び長野経由で無事東京へ帰着した。

神山教会演奏会の歴史

大村 恵美子

8月1日 - 4日の野尻湖合宿で、『40年の記録』の出版にたずさわられた山下広之さんが、さっそくその年表から野尻湖・神山教会演奏会に関わる項目をピックアップした表を、配ってくださった。

あれこれ思い出しながら見ていると、興味はつきないが、その中から気づいたことを、いくつかお伝えしよう。

1. 合唱団発足1年後の1963年夏に、野尻湖合宿が始まり、翌1964年には、次回から神山教会で演奏する計画が練られ、地元の承諾もいただいた。
2. 1965年、第1回演奏会。以後ほぼ毎年つづけられ、2002年8月3日の演奏会をもって、32回を数えることになる。
3. この37年間(1965 - 2002年)に、演奏会が行われなかったのは6回。
 - 1) 指揮者その他いくつかの点で準備が整わず、流会となった2回(1973、76年)
 - 2) ヨーロッパ演奏旅行のため4回。(1983、88、93、97年)
4. 指揮は次の7人で行われた。
 - 1) 小林道夫(指揮・ピアノを兼ねる)7回。(1965、67、68、69、70、71、72年)
 - 2) 長谷川朝雄1回(1966年)
 - 3) 山田 茂 1回(1974年)
 - 4) 渡邊 明 4回(1975、77、87、96年)
 - 5) 池田 明良 1回(1981年)

- 6) 佐々木正利 1回(1994年)
 7) 大村恵美子 17回(1978年より)
5. ピアノ伴奏は次の10人で行われた。
- 1) 小林道夫 7回(1965-72年)
 2) 大村恵美子 3回(1966、75、77年)
 3) 秀村冠一 1回(1974年)
 4) 菊沢恭子 2回(1978、79年)
 5) 西川秀人 3回(1980、81、82年)
 6) 森永純子 4回(1984、85、86、87年)
 7) 関 紅子 5回(1989、90、91、92、94年)
 8) 岩瀬英子 4回(1994、95、96、98年)
 9) 巻島佐絵子 1回(1999年)
 10) 内山亜希 3回(2000、01、02年)
6. 今回演奏された3曲のカンタータは、神山教会においては、2曲が再演、1曲が初演にあたる。
- カンタータ 104番(1994、2002年)
 カンタータ 124番(2002年)
 カンタータ 150番(1979、2002年)
7. 『40年の記録』の年表中、神山教会演奏会関係で訂正・補足する3箇所。
- 1) 1978年8月5日の項に追加。
 ヴァイオリン：高橋直子、ヘンデル「ヴァイオリン・ソナタ 第4番 二長調」
- 2) 1979年8月4日の項の訂正と追加。
 カンタータ 190番は196番の誤り
 追加 = ヴァイオリン：藤井良子、ヴィオラ：豊国 亮、チェロ：篠田二美、ピアノ：菊沢恭子
- 3) 1999年8月のこの項目は欠落。
 1999年8月6日。第29回野尻湖特別演奏会。
 指揮：大村恵美子、テノール：小川好計、ヴァイオリン：小田幸子、ピアノ：巻島佐絵子。
 カンタータ 82番、84番、120番、207番、
 「無伴奏パルティータ 第3番」BWV1006より。

今後も、熱心に待っていてくださる聴衆に迎えられるかぎり、いろいろ趣向をこらして、毎年欠かさずつづけてゆきたいと思っている。

第19回 ばっはめいと 夏の演奏会を終えて

夏の演奏会は、こどもたちの成長のアルバム

星野 弥生(後援会員)

<ばっはめいと>の夏の演奏会に、今22歳の息子がデビューしたのが、彼が7歳(小学校2年)の時だったから、もう15年も前になります。表参道のカワイ楽器のビルにあるとてもおしゃれな雰囲気のティー・サロンで、床に足のとどかない子どもが、ペールギュントの「朝」やフランスの童謡「月の光」

だったかな(森井眞先生の名訳がついてました)などを数曲弾いて、「経堂のブーニン」とかおだてられました。なぜか、男の子がピアノ弾くってカッコいい、と勝手に思っていた私は、ブーニンにならずとも続けてほしい、と念じていて、それが伝わったのか、あるいは、ピアノを弾いていると機嫌がいい母親を察知していたのか、いまなお引退はしていないようです。大学院生となり勉強とバイトが忙しいと、ほとんど辞めかけていたのですが、5年遅れでデビューした娘が、今年一人で参加をするはずが、直前に学校の臨海学校の初日と演奏会が重なることが判明。15年間で、初めて我が家から誰も出演者がでないことになる、とあきらめましたが、ここで恵美子先生のウルトラCが。「ねえ、亮くんが代わりに弾くのはどう?なんか弾けるのがあるでしょう?」と言われ、そんなこと頼もうものなら、ハナから怒られそうだと私はコワクテできなかったけれど、恵美子先生にはなかなか断ることのできない彼は、結局「はい」と引き受けてしまったようなのです。だいが前に習ったショパンのマズルカでなんとかしのぎましたが、妹のせいでとばかりを受けた、とブンブンしていました。しかし、ガンコものの首をたてにふらせてしまう恵美子先生の迫力はスゴイ!

クダンの妹ですが、小さい時からこれまた石のようにガンコで、泣いたり、怒ったりと先生の手をやかせていましたが、それでも不思議なことに、イヤといわずにもう10年ほどもつづけています。音楽といえば、ラルクだ、宇多田ヒカルだ、ナンとかだと、ほとんどJポップしか興味ないのだけれど、ピアノだけは、モーツァルトのソナタを結構こなし、今は「まゆ、パッパ好きなんだよね」なんて、先生も親も涙しそうなせりふをいいながら、インベンションに挑戦しています。

子どもは親の思うようになって育つわけがないけれど、毎日のぶつかりあいの中で、たまにピアノの音が聞こえてくると、「ま、いいか」などという気になります。子はお見通しなのか。もう7年以上前に亡くなった母が、「嫁入り道具なんていらぬ」と勝手に生活をはじめてしまった私に、しばらくたってから筆筒のかわりに中古のピアノを買ってくれました。そのピアノが、それほど出番はなくともずっと現役でいて、子どもたちも私も思い出したように弾く。そして何とか途切れずに、1人が2人になって、毎夏の演奏会はアルバムのページを増やしていきま。座って足をぶらぶらさせていた子どもが、いすの高さを低くするようになって、1年前より、ちょっと難しい曲を弾いている。こんなシアワセな光景がまだまだ続くといいなあ、と願っています。